

男性性・女性性と自立・依存

中塚 善次郎・清重 友輝

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第52号抜刷）

男性性・女性性と自立・依存

The relationship masculinity-femininity between independence-dependence

中塚 善次郎・清重 友輝*

キーワード：性差、自立、依存、自己・他己双対理論

問題と目的

1. 男性性と女性性

男性と女性の特性の違いを性差 (sex difference) と言うが、この性差に関する問題は、かなり複雑な面を持っている。

かつて、近代西欧社会においては、男女は身体的のみならず精神的にも全く異なる存在とされ、その違いは生物学的に決定されているという社会通念が広く流布していた。そして、人間科学や社会科学も、その社会通念を固定化する方向で、形成されてきた。

しかし、1960年代のアメリカに端を発する第二次フェミニズム運動の台頭や、それによるジェンダーフリー等の思想の流布により、近年では、男女の間に精神的・心理的な相違はないとする主張が強くなってきた。田中(1995)は、「女性と男性との心理学的相違は近年縮まる傾向にある。身体的相違は如何ともし難いが、心理学的には、両性間にそれほど大きな差がないのではないかと考えられるようになってきた」と述べている。

男性と女性に心理学的相違がないとする考えが広がってきた背景には、民主主義的な男女平等思想の普及があると見られるが、そうした動きの特徴として、男

尊女卑の差別を撤廃しようとするねらいを伴うことがある。つまり、男女の心理に先天的な違いがないとする主張には、男性に比べ女性が劣っているというような、差別的な思想を排除しようとする意図があると見られる。そして、このことが、性差の問題を複雑にしている大きな要因と考えられる。

もちろん、男女平等思想の普及は間違いではないし、男尊女卑の差別を撤廃することは、当然そうすべきことである。

だが、性差がこうした男女の社会的地位や差別の問題と結びつくことで、性差の問題は、必要以上にデリケートなものとなってしまっている感がある。

本来、男女の間に特性の違いがあっても、それ自体が否定されなければならない理由はどこにもない。また、男女にはっきりした身体的違いがあるのと同様に、心理的にも何らかの差異があると考えことは、それほど奇異なことではない。

だが、性差に優劣の視点が持ち込まれ、差別問題が絡むことで、近年では、性差そのものを否定するような流れが生じている。その結果、男女の違いを論じること自体が、タブーであるかのような風潮さえ生まれている。サイモン・バロン＝コーエンは、著書『共感する女脳、システム化する男脳』(三宅訳、2005)の中で、「このようなテーマ(性差)は政治的に扱いが難しく、1990年代にはとても発表することなどできなかった」とさえ、述べている。

* ひびきのさと人間精神学研究所

正直に言って、こうした性差の否定やタブー視は、その意図するところがどうであれ、行き過ぎたものであるし、正しいことではないと感じている。

男女の間に差異があるとしても、それは、一方の性が他方の性より劣っていることを示すのではなく、それぞれに得手不得手があると捉えるべきであろう。それは、優劣ではなく、単なる特徴の違いである。

男性と女性の間心理的な差異があり、それぞれに異なる特徴があるとすれば、そうした特徴は尊重すべきであるし、それを活用し、よりよい自己の在り方を模索すべきである。それが、本当の意味での性の尊重であるだろう。強硬なフェミニストは、性差を否定することで、女性の優れた部分をも否定することがある。それは、女性を尊重するのではなく、かえって貶める行為であるように思われる。

日笠（1995）は、「社会的な差別や不利を排除しながらも、女性と男性の生物学的・心理学的な違いを認め、女性であることの強さを尊重し、女性である自分を自分らしく生きること支えることのできる視点が望まれる」と述べている。男性と女性の違いを認め、その上で、両者の特徴を活かす道を模索することは、男女双方にメリットがある。男女が互いに自らの得意分野に励み、また、不得意な分野を相互に補い合うとすれば、素晴らしい結果を得ることになるだろう。

今後、性差にかかわる問題は、これまでの性差を否定する流れから、性差を肯定し、それを活かす流れへと転換するべきではないかと考える。

2. 自立と依存

それでは、男性と女性の性差を肯定するとして、それぞれにどのような特徴が認められるだろうか。

一般的に、両者の心理的相違として、よく持ち出されるのは、男性が自立的で、女性が依存的であるというものである。間宮（1979）は、「(男女それぞれの性格は) 時代の流れや社会の枠組みの変動によって変わるであろうが、少なくとも、従来考えられてきた男女それぞれの性格の基本構造は、依存性(女) - 自立性(男) と同調性(女) - 非同調性(男) とに集約する

ことができよう」と述べている。

こうした場合の自立・依存には、注意すべき点がある。それは、先の男女間の優劣と同様に、自立が優れており、依存が劣っているというような、偏った捉え方をされることが多いことである。

実際、他者への依存から脱し、自立を進めていくことが人間の発達であるという考え方は、かなり広範に流布している。例えば、近代以降の教育思想には、自己確立を重視する傾向が見られるが、それも自立重視の発達観をもとに形成されていると考えられる。

自立>依存の価値観をもとに、男性が自立的で女性が依存的であるとするのは、男性の女性に対する優位を認めることになる。従って、男女平等を主張する人々は、男性を自立的で女性を依存的と見ることに否定的である。

だが、こうした動きとは別に、一部では、自立・依存の概念を再構成し、自立>依存の関係を見直そうとする動きも出てきている。

高橋（1969）は、「依存性から自立への発達過程とは、依存性の発達の変容の過程にほかならない」とし、「自立とは『依存要求の即時的な充足に対して、文脈に応じた統一的な自己の立場から決定を下すことを優先させる状態である』といえよう」と述べている。また、神谷（2002）は、「自立は大きく“独立性”と“依存性”の2下位概念から構成されると考えるのがより妥当ではなかろうか」と述べている。

これらの見解の要諦は、自立と依存を単純な対概念として捉えるのではなく、両者のバランスのとれた共存を、発達の一つの理想型とすることにある。これはつまり、人間における依存の重要性を積極的に認めることで、自立と依存を等価値のものとして再評価することを意味している。

そもそも、人間は他者との関係性の中で生まれ育ち、生きていく存在である。人間は、人と人とのかかわり合いの網目の中で生きるものであり、他者との関係なくしては存在できない。これは、人間が本質的に他者への依存を必要としていることを意味している。

これらを踏まえれば、従来の自立偏重の考え方には、

少なからず問題があると見るべきであるし、依存という概念には、より肯定的な評価を与えるべきであろう。

そして、自立と依存から優劣の視点を取り除き、両者を等価値のものとするのであれば、男性＝自立的、女性＝依存的という図式は、両性の特徴を表すのに、適正な指標の一つとなり得るのではないかと考える。少なくとも、その妥当性を検討する価値は、十分にあると思われる。

3. 傾自己性・傾他者性

男性と女性における、自立・依存の傾向を検討するには、まず、心理的な傾向としての、自立・依存の概念を明確化しておく必要がある。

自立とは、他者の援助や支配を受けずに、自分の力で身を立てるという意味の語であるが、これを心理的な傾向として解釈した場合、「他者を頼りとせず、個人としての自己を尊重・確立し、また他者に対し自己を主張しようとする傾向」と言うことができる。端的に言えば、自己という存在を尊重し、追求しようとする傾向で、他者よりも自己を重視するという意味で、「傾自己性」と言うことができるだろう。

一方、依存とは、他者に頼って在ること、生きることを指す語であるが、これを心理的な傾向として見た場合、「他者に対し心を開き、他者と心を通わせ、他者との関係性を自らの支えにしようとする傾向」と言うことができる。端的に言えば、他者との関係を尊重し、他者との交流を求めようとする傾向で、自己よりも他者を重視するという意味で、「傾他者性」と言うことができるだろう。

本論では、自立＝傾自己性、依存＝傾他者性と定義し、これらと男性性・女性性との関連を検討する。

方 法

1. 被験者

津山市に存在する高校の生徒 340 名（男性 101 名、女性 239 名）、同市に存在する大学の学生、165 名（男性 50 名、女性 115 名）の合計 505 名。内訳は表 1 の

通りである。

表 1 被験者

	A 高校	B 高校	C 高校	大学	合計
男	37 名	27 名	37 名	50 名	151 名
女	75 名	90 名	74 名	115 名	354 名

2. 実施した検査

中塚の指導・援助で、熊谷（2006）が「精神的自立と依存」を測定するために構成した 6 尺度（各尺度 10 項目）を用いた。60 の質問項目を尺度ごとに循環させて、順次配置して質問紙とした。詳細は表 2 の通りである。

結 果

調査結果である、全員の男女別 6 尺度の平均と標準偏差は表 3 の通りである。

表 3 に示す通り、傾他者性（依存）に関する尺度である（1）社会・規範性、（2）コミュニケーション、（3）他者・社会定位では、いずれの平均値も男子学生より女子学生のほうが高かった。また、傾自己性（自立）に関する尺度である（4）内的自己確立、（5）外的自己拡張、（6）自己・個人定位では、いずれの平均値も女子学生より男子学生のほうが高かった。

なお、紙幅の都合で表示は省略するが、表 1 の各学校ごとの男女別 6 尺度の平均についても、どの集団も例外なく、傾他者性に関する 3 尺度それぞれの平均値は女子学生の方が高く、傾自己性に関する 3 尺度それぞれの平均値は男子学生の方が高かった。

考 察

今回の調査では、各高校の別、または高校と大学の別にかかわらず、いずれの学校でも、傾自己性（自立）に関する 3 尺度それぞれの平均値は、すべて男子学生のほうが高く、傾他者性（依存）に関する 3 尺度それぞれの平均値は、すべて女子学生のほうが高かつ

表2 尺度名、尺度の説明、 α 係数、所属項目の例示

	構成された尺度 (分類)・尺度の説明	α 係数	所属項目 (所属 10 項目中、2 項目の例示)
傾他性 (依存)	1. 社会・規範性 社会や規範を尊重し、社会の中での自らの行動の仕方を基本的にわきまえているかどうかを測る尺度。	0.735	・約束事は必ず守りたい。 ・ボランティアは積極的にしたいと思っている。等
	2. コミュニケーション 他者に心を開き、他者と心を通わせようとしているかどうかを測る尺度。		・たとえ買い物でもお店の人には必ずお礼を言う。 ・人に会ったら、「お元気ですか」など気を配るようになっている。等
	3. 他者・社会定位 他者と情動の共有をすることで、他者を心の支えとしようとしているかどうかを測る尺度。	0.824	・嬉しいことがあると、つい人に話してしまう。 ・困ったときには人に助けを求めたいと思う。等
傾自己性 (自立)	4. 内的自己確立 自己を個人として尊重し、自分の個性を伸ばし発展させようとしているかどうかを測る尺度。	0.832	・状況や他人の意見にあまり流されない方である。 ・自分なりの考えや意見を持っている。等
	5. 外的自己拡張 他者の思いにとらわれず、他者に対して自己を主張しようとしているかどうかを測る尺度。	0.807	・正しいと思うことは人にかまわず実行する方である。 ・自分の権利ははっきり主張する。等
	6. 自己・個人定位 他者を頼りにしないで、自分の力で何事もやりとげたいと思っているかどうかを測る尺度。	0.845	・他人に甘えたいという気持ちはあまり起こらない。 ・この世で頼りになるのは自分だけである。等

表3 全員の男女別 6 尺度の平均と (標準偏差)

	1. 社会・規範性	2. コミュニケーション	3. 他者・社会定位	4. 内的自己確立	5. 外的自己拡張	6. 自己・個人定位
男 (151 名)	29.52 (4.20)	30.46 (4.55)	30.45 (4.74)	29.17 (4.98)	27.05 (4.77)	24.99 (4.97)
女 (354 名)	30.48 (3.67)	32.29 (4.00)	32.94 (4.46)	27.65 (4.72)	26.24 (5.02)	23.65 (5.23)

た。

これらの結果から、平均的な特徴として、男性は女性よりも傾自己性が高く、より自立的であると言うことができ、女性は男性よりも傾他者性が高く、より依存的であると言うことができる。これは、従来の性差の特徴である、男性＝自立的、女性＝依存的という枠組みともよく一致している。

それでは、男性は傾自己性が高く、女性は傾他者性が高いことは、人間精神においてどのような意味を持つのか。この点を、中塚 (1994) の「人間精神の心理学モデル」(表4・図1)をもとに、若干の検討を行う。

中塚のモデルの主要点は、人間の精神構造が、「自己」と「他己」という2つの相矛盾する弁証法的モーメント (契機) から成り立っているとする点にある。

自己は「自分自身を知ることを目指して、より善く生きようとする」働きであり、他己は、「法を目指して、より善く社会的であろうとする」働きである。換言すると、人間精神は、自分自身を追求する内的な自己と、他者や外界を求め指向する外的な他己との、2つのモーメントをもつ、弁証法的運動であると考えられている。

この2つのモーメントに5つの機能領域があり、各機能領域ごとに統合された機能があると仮定している (表4)。そして、各機能領域は、単に層構造をなしているだけでなく、領域間には密接な関連があり、これら機能領域間にも統合が存在する (図1)。

このモデルに照らすと、傾自己性は自己モーメントに属し、傾他者性は他己モーメントに属する。つまり、

表 4 精神の弁証法的二重性と心理機能(中塚,1994)

自己の モーメント	他己の モーメント	固有な機能
自我	人格	統合性・目的性・一貫性
認知	言語	知能、知識の創造と蓄積
感覚	運動	技能、外界への適応行動
情動	感情	通心、内界の心的な処理
個人的 無意識	集会的 無意識	遺伝形質と生の衝動 人類が共有する無垢なもの

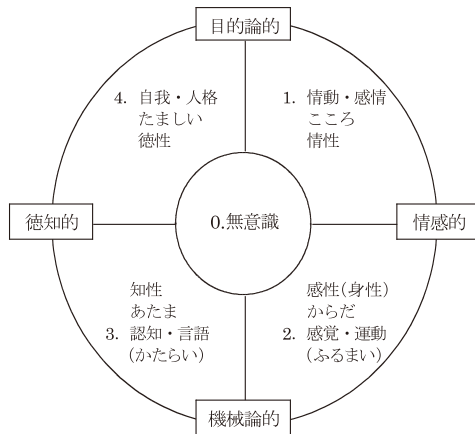


図 1 精神機能領域の座標表示 (中塚, 1994)

男性は自己モーメントの働きが優位な傾向があり、女性は他己モーメントの働きが優位な傾向がある、ということになる。

自己と他己は相矛盾する性質を持つために、一方の強化は、他方の相対的な弱体化につながる。従って、自己の働きが強い場合には、他己の働きは弱まり、逆に他己の働きが強い場合には、自己の働きが弱まることになる。

これらの点を踏まえれば、男性性（傾自己性>傾他者性）の特徴は以下のように表すことができる。

- ・自己を知り、より善い自己を目指そうとする傾向が強い。つまり、自己追求的である。
- ・他者よりも自分を尊重する傾向が強い。ゆえに、

自己主張が強く、自己中心的な性質を持つ。

- ・内的な自己に関心が向いているために、他者に対する配慮に欠け、共感が薄い面がある。このことが、攻撃性の高さや規範性の低さに結びつくことがある。逆に、規範を逸脱することで、高い創造性を発揮することもある。

これに対し、女性性（傾自己性<傾他者性）の特徴は以下のように表すことができる。

- ・法を目指し、より善く社会的であろうとする傾向が強い。つまり、規範性が高く、向社会的な傾向が強い。
- ・自己よりも他者を尊重する傾向が強い。ゆえに、自己抑制的であり、自己追求よりも他者との関係性を重視する面がある。
- ・外的な他者に関心が向いているために、他者への気遣いや共感に優れている。このことが、優しさや道徳心の高さに結びつくことがある。

両者の特徴は、男性性は自己追求的で、女性性は他者尊重的ということに集約される。これは、男性と女性では、目指す目的や価値に違いがあることを示している。

男性には自己優位の傾向があり、他者への配慮よりも自己追求が優先的な目的となる。このために、自己実現などを図りやすい反面、他者への共感度は低くなりがちで、自己本位に陥りやすい面があると考えられる。

女性の場合、他己優位の傾向があり、自己追求よりも他者との関係性の保持が優先的な目的となる。このために、他者への共感に優れる反面、自己追求を不得手とする面があると考えられる。

また、モデルに示した各機能領域についても、これら自・他の目的性に対応する形で、男性は自我・認知・感覚・情動機能の働きが高く、女性は人格・言語・運動・感情機能の働きが高いと考えられる。

パロン＝コーエン（2005）は、「平均的に女性は男性よりも労せずして相手に深く共感する傾向がある」

とし、そうした傾向はかなり幼い頃から見られるとした上で、「男の子は女の子ほど共感が働かず、自己中心的にふるまう傾向が強い」と述べている。そして、その根拠として、男子と女子の遊び方の違い、サイコパスや殺人事件にかかわる男性の数の多さ、サマーキャンプ時の行動や日常会話の内容における男女差などを例示している。男性が自己中心的で、女性が共感に優れるとする彼の主張は、筆者らの示す男性性・女性性の特徴とよく一致している。

さらに、中塚（1998）は、自己と他己が脳の左右半球と対応し、左半球は他己（人格＋言語＋運動＋感情）を司り、右半球は自己（自我＋認知＋感覚＋情動）を司りとしているが、バロン＝コーエン（2005）は、「男性は右脳の働きと関連した技能にすぐれ、女性は左脳の働きと関連した技能にすぐれている」と述べている。これも、筆者らの主張を支持するものと言える。

最後に補足しておきたいのは、本論で示した男性性・女性性の特徴は、あくまでも男性と女性という集団を比較した上での、平均的な傾向にすぎないということである。

各個人には様々な差異があり、属する集団の平均から外れることも珍しいことではない。全ての男性が傾自己性が高いわけではないし、全ての女性が傾他者性が高いわけでもない。男性であっても、他者への共感に優れた者もいるし、女性でも自己追求的な者もいる。従って、男性性や女性性をステレオタイプ化し、すべての個人に当てはめようとするのは、間違いである。

また、男性性と女性性に優劣はないということも、再度、強調しておきたい。中塚のモデルでは、自己と他己は相矛盾する性質を持ちながら、どちらも人間には不可欠のものとする。従って、精神作用がどちらかに著しく偏ることは望ましいことではなく、両者のバランスが重要になる。男性が傾自己性が高いのなら、それは意識的に他者への配慮を強める必要があることを示しているし、女性が傾他者性が高いのなら、他者との関係に流されないよう注意する必要があることを示している。

自らの特性を知ることで、よりよい自己の在り方を

目指すことが可能になる。それこそが、性差を明らかにすることで得られる、最大の利点と考える。

付記：表 2 と表 3 のデータは、中塚の指導・援助による塚本藍の卒業論文『傾自己性と傾他者性概念の明確化と差異の検討』（2006 年度提出）に基づくものである。

文 献

- 1) バロン＝コーエン, S. 三宅真砂子訳 (2005) 共感する女脳, システム化する男脳, NHK 出版. (Baron-Cohen, S. (2004) *The Essential Difference*, Penguin Books.)
- 2) 日笠摩子 (1995) 女性の発達の諸相概観－女性自身が語る発達, 現代のエスプリ, 331, pp.80-92.
- 3) 神谷ゆかり (2002) 特性概念としての精神的自立に関する実証的研究, 風間書房.
- 4) 熊谷恵理子 (2006) 女子学生の精神的自立と依存に関する尺度の作成および信頼性・妥当性の検討, 美作大学卒業論文 (未公開).
- 5) 間宮武 (1979) 性差心理学, 金子書房.
- 6) 中塚善次郎 (1994) 人間精神学序説－自我統合の哲学的心理学の構築－ 風間書房.
- 7) 中塚善次郎 (1998) 自閉症児における左半球障害新仮説の提示－コミュニケーション障害の大脳生理学的基礎をより深く理解するために－, 鳴門教育大学学校教育研究センター紀要, 12, 21-30.
- 8) 高橋恵子 (1969) 子どもの社会化過程と依存性. 桂広介・園原太郎・波多野完治・山下俊郎・依田新監修 岡本夏木・古沢頼雄・高野清純・波多野諄余夫・藤沢保編 人格の発達, 金子書房, pp.91-136.
- 9) 田中マユミ (1995) 心理学的性差, 現代のエスプリ, 331, pp.18-34.